

事實は小説よりも奇なり

霧島菊花

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

若き日の過ち遠い日の記憶

ああ青春の日々

目次

| | |
|-------|----|
| 探り | 33 |
| ナルシスト | 29 |
| 席替え | 24 |
| 偶像 | 19 |
| 露見 | 13 |
| 別れ | 5 |
| 痛恨 | 1 |

痛恨

高校二年に無事進学し少し早めに教室へ向かう。

彼女達がいる事を知っているからだ。

美「おはよう、早いな。」

僕に挨拶をしながら何かを書き写している、何かとは宿題以外の何物でもないのだが
：

美術部で何を描いているのかは分からないが、彼女は口癖のように『時間が無い』と言っている。

宿題をやる時間を削ってまで何をやっていることやら？

僕は自分の机に鞆を置いて彼女達の方へ足を向けた。

もう一人の放送部の娘から挨拶をされるも、軽く受け流し美術部の娘へ声を掛けようとした。

美「ところで、宿題はやったのか？」

僕「やってないよ。」

美「そうか、期待していたのだから……」

何だそれ？

写す気満々ヤル気無し……

僕「もし良かったら、写し終わったら見せてくれない？」

美「何で私が貸さなければならぬのだ？こつちから借りればいいだろう。」

彼女の言い分も最もだ。オリジナルは放送部の娘なのだから、しかし、僕はこれを断った。

僕「大変有難い申し出では有りますが、丁重にお断りさせて頂います。」

僕の言い方が大変お気に召された様で放送部の娘が割って入った。

あからさまに不機嫌な態度で……

放「私、何か貴方の気に触る様な事言った？」

僕「へく、身に覚えが無いんだ？」

放「放送部Bさん、貴方に対し気があるよって言ったただけでしょ！」

この女……

一度ならず二度までも言い放ったな……

あの時と同じ様に、いや、今回は怒気を孕んだ視線を投げつけた。

一度目は呆然と眺めるだけしかできなかつたから……

美「何だ、そういう事か……」

彼女は一言そう零すと事情を察した様で、僕に写したノートを貸してくれた。いきなりバレてしまった様だ。

今回はこの娘の優しさに甘えるところでしょう。

僕「ありがとう。」

彼女からノートを受け取り自分の席へ行こうと振り返ったら背後から話し声が聞こえて来た。

放「どういう事？」

美「アホかお前は！」

先が思いやられる……

ガリ勉つて恋愛の機微に疎いのね……

話は三ヶ月前に遡る。

一年生の頃は放送部Bの娘とクラスメイトであり、彼女と一緒に試験を受けようと僕を誘ったのだ。

試験の補習の時に隣のクラスであつた彼女達と知り合う事になる。

この時に何の因果か？

放送部の娘と二人きりになり、痛恨の一撃を食らったのだ。

その後、学校の帰り道

クラスメイトの放送部の娘と並んで下校している時の事。

放送部B「私と一緒にいるの迷惑？」

僕「えっ？そんな事ないよ。」

放送部B「さつきから溜息ばかり付いてるけど…」

僕「えっ？そうなの？…気が付かなかった。」

放送部B「あの…私に言える事があるなら言つて。」

言える訳ないでしょう…

こうして二人の溜息合戦が始まった。

この時、僕は彼女にバレていると言う事を知らなかった。

別れ

「付き合って欲しい。」

放B 「本気で言ってるの？」

「冗談に聞こえた？」

放B 「そうじゃないけど…」

「駄目かな？」

放B 「良いけど…」

こうして僕は彼女との交際を始めた。

お互いの家を行き来し、博覧会へ遊びにも行った。

学校のウラ側なんだけど。

彼女の家での会話。

二人きりで間が持たないから彼女からの提案。

放B 「一緒に勉強しよない？」

「良いよ。」

しかしながら、彼女の右手は動く気配は無く顔を真っ赤に染め上げている。

彼女の勉強机の隣で僕は彼女の顔を眺めていたのだが…

「キスしていい?」

放B 「えっ…いいけど…恥ずかしいじゃん…」

彼女の言葉を無視して右手を伸ばし彼女の下顎に掛けクツと上に持ち上げた。

そして、そつと優しく唇を重ねた。

彼女は恥ずかしかがって顔を伏せ、数度深く深呼吸した。

しばらくすると何か吹っ切れたかのように話し始めた。

放B 「あの、ちよつと聞いていい、貴方が好きな人って放送部の娘だよね、何でこ

んな事するの?」

逆にこちらが驚いた!

それを承知の上でこちらのキスを受け入れたの?

放B 「ねえ、答えてよ!」

「どつちから?」

放B 「どちつでも!」

要するに全部話せて事ね。

「キスって愛情表現でしょ?」

したいと思ったから。」

放B 「私に？」

「そう。」

放B 「わかんない！でも、あの人の事好きなんだよね？」

「わかんない！」

放B 「どうして？」

「それなんだけど…どうして君が知ってるの？」

放B 「本人から聞いた。」

思わず笑ってしまった。

これ程間抜けな話があるだろうか？

「君が『話して欲しい』って言ってたのこれの事だったのね？」

放B 「そう、何で言ってくれなかったの？」

「君を傷つけると思ったら…気があるでしょ？」

放B 「うん、まあね…」

「こつもね、気が動転してどうして良いのか分からなかったの。」

放B 「わかるような気がする…」

「今でもそうなのね…君が好きなのかどうか分からないけど…したいと思ったから…」

放B 「それって告白してるようなものだけど…」

「でもどうして受け入れたの？」

放B 「したいと思ったから…」

「告白してるようなものでしょう？」

彼女は耳まで赤らめながら視線を逸らし俯いた。

放B 「女の子だったら…経験したいって思うのね…」

やばい！

今度はこちらが俯いた。

マジですか？

これ…

お互い俯いまま、上目遣いで視線を交わす。

放B 「ねえ、ちよつと、聞いてる？」

「はい、聞いてます。」

放B 「だから、何でかなって思ったの…」

「初めてだったの？」

放B 「うん、貴方は…」

「違うよ。」

放B 「だからそんなに余裕なんだ…うわ…どうしよう？
本気で私の事好きなの？」

「それね、前に言つてよ！

そしたら止まったのに…

今言われてもそつちに流れちゃうでしょう？」

放B 「わかるような気がする。」

「傷つけちゃったかな？」

お互い顔を上げて視線が交差したが彼女はすぐに顔を俯かせた、こちらも合わせて俯いた。

放B 「でも、恋愛つてそういうものじゃない。

どちつかを選べばどちつかは傷つくんだから…」

そうか、彼女の中では二股は存在出来ないんだ。

彼女との接吻によりようやく回復してくる自分が居た。

「いめん…」

放B 「何で謝るの？ねえ、答えてよ！」

「少し考えさせて欲しい。」

放B 「放送部の娘…彼氏居るよ。」

「そんな気はしてた。」

放B 「なんで？」

「君に対して気を使うと言う事は、心にゆとりがあるって事、そう言う事でしょう…」

放B 「あつ…そつか…」

「だから…どうして良いのか分からないの…」

三学期の終業式も終わり、いつものように二人で下校している時の事。

「僕達別れようか？」

放B 「それが答えなの？」

「振り回しちやったみたいでゴメンね。」

放B 「楽しかったから良いんだけど…」

ああ、でも四月からどうしよう？

また同じクラスになれるといいね。」

「ヤツと同じだったらどうするの？」

放B 「困る！」

「腕貸そうか？」

放B 「それも困る、彼氏出来なくなっちゃうから…」

「それもそうだ。」(笑)

この提案に彼女が乗った時に薄々感じていたのだが、女の子の立場では気があると思つて良い。

同様にその位のリスクがあるからだ。

放B 「何?、貴方だつて困るでしょう?」

笑つている僕がそんなに可笑しいのか?

「全然困らない。」

放B 「どうして?」

「解る人だと思つ?」

今度は彼女が俯いたが、顔は笑っている。

放B 「それはそうだけど…」

僕の意中の女性を本人の口から直接聞いているのだから。

それも本人が全く気が付かない状態で…

これ程の鈍感見た事はないだろう。

では、あの時何が起きたのか?

補習が終わり帰り際に美術部の娘と放送部Bさんが席を外し、二人つきりになった

時、彼女はにっこり微笑んで話しかけてきた。

放「放送部Bさん可愛いよね。」

「そうですね。」

こちらはポーカーフェイスで答えた。

放「放送部Bさん、貴方に対し気があるよ。」

予想を超えた発言に呆然として彼女の瞳を見つめた。

放「何でそんな顔するの？」

私、何か変な事でも言った？」

ここまでは不審な表情、しかし、ここから自分の思いが伝わらない苛立ち、怒りを込めて言葉を続けた。

放「そんな顔してたら、何か私が悪いこと言ってるみたいじゃん、答えてよ！」

ここで僕から視線を逸らし窓の外を見て吐き捨てる様に言葉を続けた。

放「別に：貴方の事だからどうでもいいけどね：」

これが彼女にどのように伝わったのだろうか？

露見

☆露見☆

早朝の宿題写しが僕の密かな愉しみとなっていた。

学校へ行くのが楽しいなどと言ったら笑われるかもしれないが、この時は楽しかった。

「おはよう。」

挨拶をした後、彼女達へ歩み寄っていく。

「電車早くなつてない?」

美「まあな、早起きは三文の徳と言うだろう。」

所で宿題はやつて来たんだろうな?」

何だその決めつけた物の言い方は? (笑)

「こちらとしては算数を見せてもらいたいのですけど、そちらのご要望は?」

美「英語を頼みたいのだが:」

放「算数って:数学なら見せてあげるよ。」

「助かります。」

放「そうそう、簿記で分からない所があるんだけど……」

「どうぞ。」

放送部の娘から数学のノートを受け取り僕は英語のノートと簿記の問題集を手渡した。

美「数学苦手なのか？」

「数学とは問題の解決方法を発見する学問です。僕は四則演算が苦手なんです。」

美「そういうことか……」

という事で僕に算数の宿題を期待するのは止めてもらいたい。

僕は早速美術部の娘の娘隣の席を借り写し始めたのだが……

鞆の中からレポート用紙を取り出し問題と答えを書き始めた。

放「えっ、何かあった？」

彼女が僕の方を覗き込んで来たのだが、自らの回答に誤りがあったのを気が付き僕からノートを奪い返した。

そんな事は御構い無しにレポートを仕上げて彼女へ渡した。

彼女は顔を僅かに染め上げて

放「出来るなら自分でやれよ！」

「めんどくさい。」

このやり取りを見ていた美術部の娘が突っ込みを入れる。
美「なんて事だ！」

私はな、お前を信頼して丸写しをしたんだぞ！

一体どうしてくれるんだ！」

それ完全に他人任せだろう！

僕も人の事は言えないが：

懐から懐中時計を取り出し時間を見計らい自分の席へ戻った。

ヤツに見つからないようにね。

こんなやり取りを数日間やっていたある日、情報処理の時間は実習がある為コンピュータ室へ移動するのだが、この時に放送部の娘が僕に話しかけて来た。

放「ねえ、私の事避けてない？」

まあ、彼女の言い分も分からないではない。

早朝の宿題写しが終わると話もせず僕は引き返すし、話しかけられても時計を気にしながらクラスのみんなが来る頃には自分の席へ戻っているからだ。

「見つからないようにしているだけです。」

ヤツにな。

ビ「久しぶり、元気だった？」

僕は頭を抱えて俯いた。

噂をすれば何とやら……見つかった……

試験の補習の時から面識はあったのだ。

ヤツは……

彼女はにっこりと微笑み

放「クラスメイトになれたね、よろしくね。」

ビ「こちらこそよろしくね。」

騒がしくなりそうだ……

授業の合間にビンタ君が僕を誘って来た。

ヤツとしては彼女達とお話ししたいのだが、一緒に受験した僕をダシに使いたいらしい。

止む得ず付き従った。

彼の恋路を邪魔したのが僕なのだから、彼にもその位の権利はあっても良いだろう……

放送部の娘の机の前に陣取りビンタ君が話しかけているのだが、僕はその隣で窓の外を眺めていた。

特に会話に割って入るつもりはなかったのだが、彼女の髪の毛の話になったので、ふと視線を彼女に向けると偶然合ってしまった。

放「なんかあったの？」

「だいたい伸びたね。」

放「3ヶ月位じゃそんなに伸びないよ。」

流石鈍感！期待通りの返事だ。

思わず口到手を当てて笑いを堪えてしまった。

あの時の彼女はボブカットで顎の高さに切り揃えられていたのだ。

今の様に肩に掛かるほど長くはない。

本人を除けば美術部の娘と僕しか知り得ないだろう。

放「何がそんなにおかしいの？」

不思議そうに僕を眺めているのだが、だからと言ってこちらは教える気は更々ない。

僕は声を出さないようにしっかりと堪えていた訳だが、不意によくない物が視界

に飛び込んだ。

放送部の娘の後ろに美術部の娘が本を片手に、右手を口に当て笑いを堪えていた。

聞こえてしまったのね：

美術部の娘へ視線を移すと彼女は本を盾に視線を遮った。

僕の様子を見た放送部の娘が後ろへ振り返り美術部の娘を見た時

美「こつちを見るんじゃない！」

即座に反撃が帰ってきた。

彼女はどれくらい前を予想したのだろうか？

最も美術部の娘もポニーテールと言えるほど長くは無かった時代の事なのだが…

偶像

放送部の娘の不用意な発言により、ビンタ君と一緒に登校する羽目となった訳だが、ヤツが節操が無い事を我々は知っているのだが…彼女は全く解ってないらしい。

初めのうちはビンタ君も大人しくしていたのだが調子こいていつもの口調で話し始めた。

ビ「ねえねえ、中○明菜って知ってる。」

放「知ってるよ、いいよね。」

僕と美術部の娘は二人の会話を聞いてはいても特に参加はしない。

放「貴方もいいなって思わない？」

こつちに振ったか…

でもね、返答のしようが無い。

「中森明○って誰？」

この返答に美術部の娘が当然の如く突っ込みを入れた。

美「お前の家にはテレビが無いのか？」

「ゲームをやる時以外付けたことがない。」

美「テレビの意味がないだろう!」

放「本気で言ってるの?」

「歌手であることは知ってるけど見たことないから。」

美「今度機会があれば貸してやろう。」

この機会は卒業間際まで引き延ばされることになったが、とにかく在学中には聴くことができた。

ビンタ君は余程気に入ったのか早朝の宿題写しに参加して来た。

参加するのがいけないと言ってる訳ではなく、写し終わるまで静かにしろよ!と言いたい。

捕まったな::ヤツに::

内心ではそう思ったが口には出さない。

「コンピュータなんて慣れれば簡単だよ。」

放「でもCOBOLって難しいよね〜」

ビ「慣れだよ慣れ!慣れれば簡単だよ!」

彼の目的は宿題ではなくお話だ。

中身の無い軽薄な会話が延々と続く。

彼の事をこう呼ぶ者もいる

『まるでラー○だな、軽いんじゃないですか?』

僕は黙々と宿題写し進行しているのだが…

放「ねえ、貴方もそう思うよね?」

今度はこっちに話を振ったか?

「終わってます。」

放「えっ…どう言うこと?」

「言語仕様は全て覚ええました。」

放「…2種の補習受けてる私でさえ覚えていないんだけど…」

「そんな補習意味あるの?」

僕は真つ直ぐに彼女を見据えた。

それを受けて彼女は視線を逸らし俯いた。

ビ「まあまあ、そう言わずにさく皆さんで楽しく話をしようよ。」

「こちらは宿題写してますので、そちらで楽しくやって下さい。」

放送部の娘にとってはかなりの衝撃だったようだ。

学校の授業が全てでは無いのだと僕が言い放ったからだ。

その後もビンタ君が芸能人の話を続いていたのだが、こちらとしては聞いても分から

ないし、そもそも知ろうともしていかない。

アイドルって何だろう？

少なくとも○森明菜は『魅せる』と思ってる。

しばらくすると今度はロリがやって来て声を掛けて来た。

ロリ「おはよう、たろさ。でっ何やってるの？」

「ご覧の通り宿題を写してる。」

ロリ「何で俺を仲間外れにするんだ？」

「しないでだろう！」

お前だつて部室で写してるだろう。」

僕がここで写した物をね。

ここで美術部の娘が割って入った。

美「おはよう、お前達仲間だったのか？」

ロリ「同じ部活だからね、でっ、たろさこそどういふ関係なの。」

「前回の試験で一緒に受けた知り合いだよ。」

ロリ「ああ、放送部Bさんと一緒に受けた危険物？」

美「何だ、彼女と知り合いなのか？」

ロリ「知り合いと言うほどの仲ではないが…」

美「挨拶して言葉を交わせば知り合いだろう、お前の知り合いとはどういう間柄なんだ？」

返答に困り果てたロリが僕に縋り付いて

ロリ「たろさく何とかしてくれ！」

美術部の娘の鋭い突っ込みにこちらへ助けを求めて来たのだが、これは無理。

「何とかするのはお前の方だろう、体の隅々まで知り合った間柄ではありません、と答えれば済む事だろう。」

ロリ「それを女の子の目の前で言うか！」

美「なんだ、その程度の間柄なんだな！」

ロリ「…やめてくれ！」

ここでロリは泣き崩れ、放送部の娘が割って入った。

放「楽しそうな話をしてるね。」

ロリ「何処がだよ！」

放「今後ともよろしくね。」

彼女はそう言ってニッコリと微笑んだ。

席替え

クラスの席替えには二つのルールがある。

①成績上位者から順番に選ぶ

②前回と同じ席には座れない

中間の試験の前にちよつとした小試験があり、これを元にして席替えが行われた。まず放送部の娘が教壇の目の前左側に陣取った。

これを受けて美術部の娘がその後方へ張り付いた。

次は僕の番なのだ：

女の子二人が『おいでおいで』と手招きをしているではないか：

そんなに俺の宿題を期待しているのか？

止むを得ず、美術部の娘の隣へ座った。

敢えて教壇の目の前は空けておく、何故ならそこへ誰が座るのか分かっているからだ。

ロリがさも当然の如く僕の前に座った。

彼が言うには、教壇の目の前は先生からの死角になるから授業中眠っていてもバレない！

マイコン部3人は一年の頃からのクラスメイトであり、行動パターンは知れたものである。

最後にビンタが僕の後方へ席を決めた。

高校の情報処理科という所は12教科あり、宿題の山に追われることになる。

当時、マイコン部3人共が早朝の宿題写しに参加する事になったのだ。

放送部、美術部の女の子とマイコン部のロリ、ビンタ、僕である。

今回の席替えを利用して五人が密集する事になった。

ある日の朝

早くから教室で宿題を写し合う不気味な集団が現れた。

放「ねえ、ここ分かる？」

後ろを振り返りながら美術部の娘に質問をしている訳だが：

そこへビンタが割って入った。

ビ「教えてあげようか？」

そう言いながら、ビンタ君は放送部の娘の前に移動して講義を始めた。

ビ「ここがね、こうでね、こうなってるね」

あつ！間違えた、こうなつてね〜」

内心：…また始まった…

ビンタのこの行動は去年、放送部Bに対して何度も行われた行為である。

あのさ、相手は放送部Bでは無いのよ、

この席は成績上位者から順番に座つてんのよ！

成績最下位の者が最上位の者に向かつて

「教えてあげようか〜」って、何考えんの？

身の程を弁えろよ！

と、言いたくもなる。

ふと視線を左へ流すと、美術部の娘がやや前傾姿勢、右手を握りしめて口元へ宛て、肩を小刻みに震わせていた。

ひよつとして…腹筋に力入ってない？

おかしい…彼女にとっては初めて見る光景に違いないのに、何故に笑う？

くだいようだか、僕とロリにとっては去年、放送Bの娘相手に何度もビンタが取った行動であり見慣れた者である。

何故にこの娘が？

ひよつとして、ビンタの本質見抜いたの？

オンナと見れば手当たり次第に声を掛ける。

彼の目的は女の子と話をするのが目的であり、「教えてあげる」とはキツカケに過ぎないのだ。

逆に話を聞かされる女の子にとっては、分からない所を教えて欲しいのであって、別に話し相手はビンタで無くても良いのだ。

僕の件と言ひ、この件と言ひ、どれ程の慧眼を持っているのだろうか？

コイツ凄いい！と思ひながら左手を口に手を当てて声が出ない様に咬み殺す。

流石のロリも去年から見慣れた光景とはいえ、ビンタの迪々しい説明に我慢の限界が来たらしい。

放送部の娘の方向へと視線を向け

『ビンタ！鬱陶しい！』

という態度をあからさまにし言葉を飲み込んでいる様に見えた。

ふと視線をその後方へ向けると美術部の娘が笑いを堪えている、疑問が起きたようである。今度はこちらを振り返った。

ロリ「たろさ、何で笑ってるの？」

そりやそうだ、僕と美術部の娘が二人揃って笑いを噛み殺しているのだから…その疑問は最もな事だと思う。

しかしながら、こちらは笑いを堪えるのが必死で返答も出来ない。そこへビンタの説明に飽きたのか？

放送部の娘もこちらへ振り返った。

質問を投げかけるロリと笑いを堪えるのが僕。

そして視線を後方へ向けるとあからさまに笑を堪える美術部の娘。

放「何で笑ってるの？」

美「そんな事聞くんじゃない！」

確かにその通り！

軽薄な男が悪いのか？

それともそれを見透かすかのように笑う彼女が悪いのか？

答えは出ないだろう…

後方から俯瞰している僕らには分かるだろうが最前線でビンタの被害に遭っている彼等には分からないのだ。

この時から僕と美術部の娘の間には何人たりとも侵入出来ない『阿吽の呼吸』があったのだ。

ナルシスト

☆ナルシスト☆

アインシュタインの相対性理論。

空間に二点を取れば1次元。

三点を取れば2次元。

4点を取れば3次元。

それに時間という概念 t を加えれば時空という概念が出来上がる。

授業と授業の合間に僕らの間で和やかな会話がなされるようになった。

ビンタ君が放送部の娘の前まで移動して

「ねえねえ、知ってる?」

と話しかけるのはロリも僕も周知の事実であり、この区画を切り離すのは去年からの経験則である。

二人だけの世界を作ってくれたまえ。

月間ニュータイ○を取りたしたロリは

ロリ「ラ○シスが可愛いんだよ。」
などとのたわまく。

それ、2次元の話だろ…こちらの世界に帰ってこいよ。
などと思ってしまうた僕は思わず本音を突き出した。

「自慢じゃないが、俺、タマネ○部隊に入れるぜ！」

タ○ネギ部隊とは『花○夢コミックス』に連載されている某作品の部隊名の事である。

そこへ美術部の娘が突っ込んだ。

美「お前達、そこには次元の壁が存在する事を分かっているのか？」

2次元と3次元には壁が存在する。

彼女の言い分は分かるのだが、僕は3次元の話をしているのだ。

そこで反論した。

「僕は3次元の話をしているのだけれども。」

美「お前、鏡見たことあるのか？」

「そんなもの見たら遅刻はおろか、学校に来れなくなるだろう。」

美「お前はナルシストか？」

「誰よりも強く、そして…美しい。」

美「お前はユ○か？」

週間少年ジャン○のネタまで付いてくる。

この美術部の女の子はどこまで知っているのだろうか？

そこへビインタ君の話に飽きたのか？

放送部の娘が割り込んだ。

放「美術部の娘とナルシスト、とつても仲がいいんだね。」

僕は鈍感娘の戯言など気にしてはいないのだが、美術部の娘がこれを迎撃をした。

左手を振り上げ人差し指を立てて。

美「お前達（放送部の娘と僕）と一緒にするんじゃない！」

私はな、ナルシスト相手に痴話喧嘩など一度もやったことはないぞ！」

全くもって正論。

次元の壁について話し合っているのであり、恋話などしていかないのだから…

「だね。」

美「だろ。」

美術部の娘と僕の間には何人たりとも入り込めないオーラバリアが展開されていた。

知らない人が聞いたら

『お前達、出来てるだろう。』

という空間が存在していたのである。

しかしながら、彼女の言った発言はそうではない。

恋愛の纏れ、痴情の纏れの会話はしていないと明言してあるのだが、鈍感娘にはそれが解らない。

お前達（放送部の娘と僕）と指を指され何の事か解らない放送部の娘はこちらに問いかけてきた。

放「えっ？ どういう事？」

「猿よりマシな脳味噌が付いているなら自分の頭で考えたらどうですか？」

僕の返答が気に入らなかつたようで質問先を真後ろへ向きを変えて。

放「どういう事？」

美「お前は猿か！」

全く見事な切り返し。

探り

とある日の出来事。

授業の合間の休憩時間。

ビンタが居ないのを見計らい何とロリが仕掛けてきたのだ。

後ろへ振り返り

ロリ「たろさと美術部の娘、仲良いね。」

「へへ、そうなんだ。」

ロリ「何でそんな目で見ると、怒らせるような事言ったか？」

「へへ、身に覚えがないんだ？」

ロリ「苛めるのは止めてくれ！」

こちらとしてはやり易い。

美術部の娘は僕の本命を知っているのだから、この手の問いを全面否定しても彼女が傷つく事はないだろう。

現に彼女がやった事なのだから。

彼はスゴスゴと引き下がり、方向を後ろから左へ変えた。

ロリ「放送部の娘とビンタ君、とつても仲良いね。」

放「止めて！」（ \wedge — \wedge ＊）

ロリ「たろさ、そう見えるよね？」

「側から見ていればね。」（笑）

放「だから止めて！」（ $\equiv\Delta\equiv$ ）

ここはロリの手に乗ってみせた。

こちらは完全に嫌がらせ。

ビンタ君を好む女の子がいるのであれば是非見てみたい。

ロリ「それにしても、よくあんなしょーもない話に笑顔で応えられるね、普通出来ないでしょう。」

放「えっ、そーお？普通じゃない？」

同意を得る事ができなかったので、今度はこちらへ振り替えた。

ロリ「たろさ、普通出来ないよね？」

成る程、放送部Bさんの事言ってるのね。

「だね。」

ロリ「放送部Bさんは『鬱陶しいから助けてくれ』って言ってきたもんね。」

放「そんな事あったんだ。」

ロリ「そんな事言われても俺達どうする事も出来ないでしょう?」

「僕は助けたけどね。」

ロリ「えっ?」

そうか、ロリは事情を知らないんだ。

美「何だ、そういう事か!」

「ですね。」

流石というべきか、一言で伝わる。

放「どういう事?」

美「お前現場に居ただろう!」

放「えっ、そうなの?」

話題についてこれないロリが質問を投げかけた。

ロリ「(美術部の娘とたるさ)二人は一体どう言う関係なの?」

「(一)覧の通り。」

放「絶対出来てるよね」

美「お前達と一緒にするんじゃない!」

今回の『お前達』、放送部の娘とロリと解釈した放送部の娘がロリに問いかけた。

放「えっ！私達そう言う関係なの？」

ロリ「もう苛めるのは止めてくれ。」

放送部の娘は会話が噛み合っていない事が分からないらしい…

今回の『お前達』、これはあくまでも僕と放送部の娘を指しているのだが…

成る程な…ロリの狙いは美術部の娘か…

この詮索、藪蛇だったな。

話は試験の補習まで遡る。

放送部の女の子二人と美術部の娘、それと僕が集まったのはこの時しかない。

その時、ビンタ君は廊下で僕らの補習が終わるのを一人待っていたのである。

そして僕は放送部Bさんと腕を組みながら下校をしていたのだが…

現場に二人共居るだろう。

放送部Bと彼氏の振りをする方法でビンタ避けをやっていたのだ。